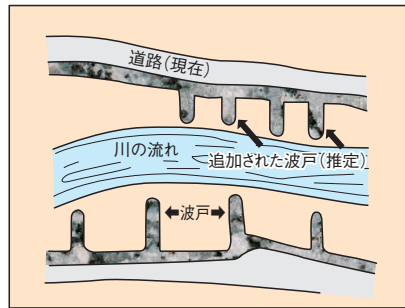


▲千鳥掛けの波戸 (推定)



▲文蔵によって改修された波戸



▲現在の石手川

## 背景

石手川は重信川の支川で延長は28kmあります。石手川は古くは城山の北側・城北地区を流れていたこともあります。足立重信による付け替え工事が実施された時には道後公園から松山東高校付近を流れ、城山の南側の二番町を經由して市役所付近を通り、そこからほぼ真っ直ぐ西へ流れて松山空港付近で伊予灘に注いでいたようです。付け替え工事後に旧河道は、埋め立てられ耕地となっていました。上流には、石手川ダムがあり、洪水調節と松山市民の水を担っています。

## アクセス 波戸

- 伊予鉄石手川駅すぐ
- 松山市立花 石手川公園内
- 緯度経度 北緯33度49分47秒, 東経132度46分04秒



重信川の由来にもなっている足立重信は、松山藩の居城を松前城から今の城山である勝山に移すにあたり、城下を流れていた石手川の氾濫による災害から城下を守るために、石手川を岩堰から新たに川を掘って出合で重信川に合流させました。

重信は、掘削をせずに両側に堤防を設け、浅く川幅の広い川にしました。しかし、石手川は急流で洪水時には水とともに大量の土砂が流れてきます。このため、土砂が川の中に堆積し度々川浚えが必要となり、また川の流れが堤防を削り、水害をもたらしていました。

石手川が付け替えられておおよそ百年後の享保二年(二七二七)、西条の浪人であった大川文蔵が松山藩に召し抱えられました。最初は、石手川の川浚えの普請組として見習いの立場にあつたようです。

享保六年、七年に大洪水があり、手腕が認められて大川文蔵が改修をまかされました。文蔵は石手川筋を見渡し、川が深ければ水害を免れることができると思えました。そこで、享保八年から一四年にかけて従来からあつた千鳥掛けの波戸(堤防から川の中央に向かって出した構造物。水制)を、両岸から一ヶ所に突き出す波戸に改修しました。この結果、文蔵が予想した通り流水は川の中央を流れ、堤防を痛めることなく次第に川が深くなっていきました。

以降文政八年(一八二五)の洪水被害まで百年間ほど大きな被害がなかったようです。大川文蔵の川の特性を考慮した河川改修によって、今日の石手川があると言われています。